PyCon APAC 2023における登壇者採択に関する調査結果

2025年4月28日
一般社団法人PyCon JP Association
内部調査委員会

1. 概要 **1**
1-1.調査の背景と目的 1
2.調査の経緯 **1**
2-1.調査の発端 1
2-2.内部調査の実施期間 2
2-3.内部調査チームの構成 2
2-4.調査手法 2
3. 調査結果 **3**
3-1.事実関係の整理 3
3-1-1.時系列の整理 3
3-1-2.採択検討の進め方について 4
3-1-3.第一回採択会議で発生したこと 5
3-2.発見された課題とその評価 5
3-2-1.CoC違反や問題行為に対する対処 5
3-2-2. 利害関係を排除する仕組みの構築 6
3-2-3. PyConコミュニティらしさの継承 6
4. 今後に向けて **7**

1. 概要

1-1.調査の背景と目的

本調査は、PyCon APAC 2023(以下、「本イベント」という。)における登壇者採択(以下、「本プロセス」という。)について、不正または不適切な行為があったとの指摘を受け、一般社団法人PyCon JP Association(以下「PyCon JP」または「弊法人」という。)としてもコミュニティとしてのあり方やPyCon JPが主催するイベントに対する信頼性に関わる重要な問題であると捉えたため、内部調査委員会を立ち上げ、本イベントの登壇者採択プロセスに関する事実関係を調査し、問題点を特定するとともに、今後の改善策を検討することを目的とする。

2.調査の経緯

2-1.調査の発端

2024年9月頃、本プロセスについて問題提起がなされたため。

詳しい経緯は以下を参照のこと。

https://pyconjp.blogspot.com/2024/10/selection-view-3.html

2-2.内部調査の実施期間

2024年10月～2025年2月

2-3.内部調査チームの構成

- 一般社団法人PyCon JP Association 理事　石田真彩
- 一般社団法人PyCon JP Association 理事　寺田学
- 外部協力者　津田麻美子氏(津田氏には弊法人の外部から中立的な立場で助言を求めた)

その他、本調査報告書の公開にあたり、法的な助言を弁護士にも求めた。

2-4.調査手法

- 各種ログの確認
    - Slack(日常のテキストコミュニケーションとして利用)のやり取り
    - 議事録のドキュメント
    - 参加者管理システム(Connpass)の参加者情報
    - 採択管理システム(pretalx)による採択者のコメントおよび採点ログ

- その他、採択プロセスにおいて利用された資料
- インタビューの実施
    - 実施方法
        - オンラインにて30分~1時間程度実施
        - 対象者1名に対し、内部調査委員会メンバー2名が対応し、個別に実施
    - 対象者（7名、うち、実施6名）
        - 本イベントの座長・副座長・コンテンツリーダーを含む運営スタッフ：5名
        - 外部レビュワー：2名
        - 外部レビュワー1名については、インタビューへの協力が得られなかった。
- その他の事実関係の確認
    - 調査方法
        - 個別の事実関係について、Slackまたはオンライン（15分程度）で実施
        - 対象者1名に対し、内部調査委員会メンバーが1名で対応し、個別に実施
    - 対象者（4名、うち、実施4名）
        - スタッフ：1名
        - 弊法人理事：1名
        - 外部レビュワー：1名
        - その他、本プロセス関係者：1名

3. 調査結果

3-1.事実関係の整理

3-1-1.時系列の整理

日付	出来事	参考
2023/5/11-2023/6/1	本イベントのプロポーザル募集（CfP）	https://pyconjp.blogspot.com/2023/04/pyconapac2023-cfp-ja.html
2023/5/17	外部レビュワー募集開始	https://pyconjp.blogspot.com/2023/05/pyconapac2023-call-for-reviewers-ja.html
2023/5/17	どのような観点でトークを評価するのかについて公開	https://pyconjp.blogspot.com/2023/05/pyconapac2023-review-points-ja.html

2023/5/30	外部レビュワーに対して、レビューポイントについてのドキュメントを提示。随時、プロポーザルの事前レビュー開始。	
2023/6下旬	一部の外部レビュワーのコメントについて、登壇者に対する攻撃的な内容が含まれることについて、スタッフ内で認知し、対応を検討する。	
2023/6末	一部の外部レビュワーより、プロポーザル採択のプロセスについて疑義が呈される。	
2023/7/3	スタッフより、プロポーザル採択プロセスについて説明する文章がSlackに投稿される。概要は以下の通り。 ・外部レビュワーが採択プロセスに関わってもらう意図や目的について再度説明。 ・採択においては、プロポーザルの内容だけではなく、本イベントテーマ/発表のジャンル/トラックの構成/日英のバランス、発表者の背景等の複数の要素を総合的に判断すること。 ・外部レビュワーについては発表内容のみを評価してもらい、それらの内容を踏まえてコアスタッフが最終的に判断する対応をしていること。	
2023/7/9	第一回採択会議 参加者は以下の通り。 ・本イベントスタッフ(座長、副座長、コンテンツリーダー、スタッフ):5名 ・弊法人理事兼スタッフ:2名 ・外部レビュワー:3名	https://pyconjp-staff.connpass.com/event/288671/
2023/7/14	第二回採択会議 参加者は以下の通り。 ・本イベントスタッフ(座長、副座長、コンテンツリーダー、スタッフ):4名 ・弊法人理事兼スタッフ:2名 ・外部レビュワー:2名	https://pyconjp-staff.connpass.com/event/290153/
2023/10/26-29	PyCon APAC 2023開催	https://2023-apac.pycon.jp/

3-1-2.採択検討の進め方について

本イベントでは、発表(30分または15分)/チュートリアル/ライトニングトーク/ポスターセッション合わせて242件の応募があった。うち、発表は193件、チュートリアルは11件であった。

この中から最終的に発表56件、チュートリアル3件を決定する必要があった。

レビュワー(スタッフおよび外部レビュワー)はシステム(pretalx)を利用して、採択会議までに点数とレビューコメントを残していく作業を担当した。

事前レビューに参加した人数は最終的に延べ、スタッフ・弊法人理事4人、外部レビュワー10人であった。

レビューは以下の通り採点を実施した。

- 0: Strong Reject

- 致命的な欠陥があり、採択したくない
- 1: Weak Reject
    - 少し足りない・間違っている部分はあるが、他の人の否定はしない
- 3: Weak Accept
    - まだ改善の余地はあるが、採択してもよい
- 5: Strong Accept
    - 完璧なプロポーザルで、是非採択したい

採択会議においては、これらの事前の採点をもとに得点の平均値を算出し、以下のように分類を行った。

- 点数の上位、かつ、強い反対意見がないもの：採択
- 点数が中位〜下位：応募の内容、プログラム全体のトラック構成・多様性・イベントテーマとの整合性を総合的に考慮して議論を実施
- 点数の下位、かつ、強い賛成意見がないもの：不採択

これは、採択会議に時間の制約がある中、多くの応募の中から採択の有無に関して議論すべきプロポーザルに優先順位をつけるために行った作業である。

採択に疑義がないもの　および　却下に疑義がないものについては議論の対象から早期に外すことにより、その他多くの当落線上にあるプロポーザルについて、その内容の議論に時間を割くことができた。

例年、採択会議は1日で実施されるが、本プロセスにおいては議論が白熱したこと、また、議論に利用していたスプレッドシートの列がずれるという確認手順の事務的不手際が議論途中に判明したことから最終的な採択数まで至らず、発表の議論が途中までとなった。そのため、2回目の採択会議を実施することとなった。

なお、チュートリアルは1回目の採択会議では時間の都合上、議論がされていない。また、チュートリアルの応募数も少なく、また、採点・事前のコメント共に採択に関する大きな議論のポイントがなかったことから、2回目の採択会議の終盤に簡単な確認を行なって採択が決定された。

3-1-3.第一回採択会議で発生したこと

採択会議においては3-1-2の通り、pretalx上のレビュー点数をもとに、上位・中位・下位に分類し、議論の優先順位を決定した。

採択基準に該当しないものは早期に不採択とし、以下のような観点で議論を進めていった。

- レビューポイントに一致しているか
- 事前レビューにおいて0点や5点といった極端な採点がなされている場合には、そのレビューコメントの内容を確認し、採択是非を判断するにあたって考慮すべき妥当性があるかどうか

最終的な採択は、座長とコンテンツリーダーが責任を持って決定した。外部レビュワーの採点やコメントはpretalx上で集計され、採択会議での重要な参考情報とされたが、最終判断は以下の点も考慮して行われた。

- レビュワーの評価が極端に割れている場合には、詳細な議論を実施。

- 特定の分野に発表内容が偏らないよう、カテゴリーごとのバランスを考慮。
    - 例えば、本イベントでは機械学習分野の応募が全体の約1/3を占めていたため、イベント全体のテーマとの整合性を考慮し、機械学習トラックを2枠程度に制限。

そのため、レビュワーの採点が直接採択を決めるわけではなく、意思決定の材料の一つとして活用された。例えば、事前レビューの点数順では機械学習分野が上位を占める傾向にあったが、バランス調整の結果、他分野の応募が優先的に採択されるケースもあった。

議論の中では、トーク採択の基準や応募内容に関して議論が白熱する場面が見られた。そのような場面の中で、一部の外部レビュワーからトーク応募者や会議参加者に対して適切とは言えない表現や議論の進行を妨げる発言が複数回みられ、その都度、複数名のスタッフから発言の表現について注意があった。

本調査対象者（2-4参照）からは、あくまで議論が白熱するなかでの不適切な発言とそれに対する注意であり、恫喝とは捉えていないという趣旨の回答を全員から得ることができた。

ただし、調査対象のうち1名、ヒアリングの実施が叶わなかった対象者がいるため、その方がどのように捉えているかについては確認ができていない。

また、採択会議の終盤、一部の外部レビュワーが採択結果の一部を応募者に伝えたことが判明し、採択の公平性が損なわれる事態となった。

この問題に対し、スタッフは当該外部レビュワーに口頭で注意を行った。

3-2.発見された課題とその評価

3-2-1.CoC違反や問題行為に対する対処

採択会議前のレビューにおいて応募者に対して不適切な言葉遣いでのレビューコメントがみられた。具体的には、「このプロポーザルは約20年前のアマチュアの趣味の水準でそこから進歩した形跡がない。ただの白骨化した死骸である。」「書いた人は脳みそが蕩けてるんじゃないか、とすら感じる。」「『しょうもな』というのが感想でした。」（いずれも原文ママ）といった表現であった。これはPyCon JP Code of Conduct（以下、「CoC」という。）「様々な背景を持つ人々を含む専門家の参加者聴衆に不適切なその他の行為」に該当する行為であり、発覚した時点で適切な対処を行うべきであった。また、本採択会議においても同様の不適切な発言や、採択会議の結果を応募者に伝えるといった問題行為が発生していた。

このような事態に対してスタッフはその発言や行為を問題と捉え、当人に対して注意を行っていたが、CoC違反を排除するようなより具体的な対応を採るまでには至らなかった。

3-2-2. 利害関係を排除する仕組みの構築

所属企業等、レビュワーと利害関係がある場合において、その利害関係による主観を排除する仕組みは未整備であった。

もっとも、利害関係があるレビュワーによる評価には主観が入り得ることは、レビュワー間でも共有されていた。本調査インタビューにおいても複数の関係者から「評価に主観が入り得るという前提を踏まえた上で、利害関係があるレビュワーのレビュー内容を受け止めるべきである」という趣

旨の発言が得られた。実際、本イベントにおいてはチュートリアルに関して一般社団法人代表理事の所属企業からの応募があり、代表理事は事前レビューに参加していた。当該チュートリアルの応募に関して、代表理事は「*書籍をベースに教えられるので内容としてはまとまっていそう *とはいえ私は関係者なのでWeak Acceptにしておく」（原文ママ）とレビューコメントを残した上で、自身が利害関係者である旨を他のレビュワーにも意識的に伝達する行動をとっている。

なお、当該チュートリアルの応募は、事前レビューの得点に基づく分類（※3-1-2を参照）において「点数の下位、かつ、強い賛成意見がないもの」に該当していたため不採択とされ、採択会議において採択可否の議論対象にはならなかった。

このように、「利害関係があるレビュワーの評価には主観が入り得る」という前提を理解した上での運用は、これまでレビュワーおよびスタッフの良心と信頼に基づいて行われていた。ただし、仮に意図的に自らの利害を持ち出し、レビューに影響を与えようとする行為があった場合に備えた仕組みやルールの構築は、当時の時点では整備されていなかった。

3-2-3. PyConコミュニティらしさの継承

PyCon JPではトークの採択にあたってスタッフ以外の外部レビュワーの参加を呼びかけるなど、意図してオープンに多様な意見を取り入れる仕組みに取り組んでおり、これはPyCon JPの特徴のひとつであると言える。ただし、外部の意見を取り入れながらも、採択を最終的に決める権限は座長やコンテンツリーダーにあった。

スタッフのうち、座長やリーダーの役割を担うようなリーダーシップを発揮するスタッフは長年運営に関わってきたメンバーが多い。また、日本におけるPyConというだけではなく、スタッフやレビュワーの中にはPyCon USやEuroPython、アジア各地のPyConや関連イベントに参加している者も多く、コミュニティ内の会話として「他のイベントではこうだった」といった情報が日常的に流通している。トーク採択にあたってはレビュー観点を設けて、できるだけ公平に判断できる仕組みを構築していた一方で、このようなコミュニティ内のコンテキストを含めた「PyConらしさ」が存在しており、採択会議の中ではレビュー観点には現れない「PyConらしさ」が採択の観点の一つになっていたことが窺われる。

このようなコンテキストは、新しい参加者（レビュワー）に伝わりきれていなかった。

PyCon JPはコミュニティであり、こういったコンテキストの存在やコミュニティとしての特徴やカルチャーを構成する一つの要素である。

ただし、このようなカルチャーが伝わるような広報活動やレビュワーを含む参加者とのコミュニケーションが充分にとれていたかというと、至らない点があった。とりわけ、Pythonの利用が多様化し、参加者の裾野が広がっていく中で、このようなコミュニケーションの不十分さが目に見えないところで齟齬を生み、問題に発展してしまった可能性を含んでいると考える。

4. 今後に向けて

調査の結果、当初指摘されていたような重大な不正や、意図的に不透明な運営が行われていたとは認められなかった。一方で、登壇者選定プロセスの一部には配慮を欠いた点や、より良い運営に向けて見直すべき点が存在していたことも事実である。

具体的には、採択に関わるレビュープロセス、コミュニケーションの透明性、問題発生時の対応フローの明確さ、利害関係者との関係性の扱いなどにおいて、より丁寧かつ明確な対応が求められる場面があった。内部調査委員会としては、これらの点について「もう一歩踏み込んだ設計と運用が必要だった」と評価している。

これらの課題に対して、運営側ではすでに対応策が講じられており、今後も継続して実施される予定であると確認している。その内容は以下の通りである。

- 問題発生時の対応方針を明文化し、スタッフ間で共有（2024年9月3日に文書として公開）
- 行動規範（CoC）および運営方針に関する研修の実施（2024年実施済み、2025年以降も継続予定）
- 意思決定の記録の徹底（Slack／議事録／タスク管理ツールにおける背景・根拠の文書化）
- 利害関係を伴う状況に備えたフローの周知徹底（予兆段階の対応を含む内容を2024年9月3日に公開済み）
- 運営の考え方や判断基準の対外的な発信と、イベント参加者・コミュニティとの継続的対話

PyCon JPは、Pythonユーザーのための場である以上、その運営のあり方がPythonユーザーから信頼されるものでなければならない。これらの取り組みは、PyCon JPが今後もエンジニアコミュニティにとって信頼できる場であり続けるための重要な基盤となる。内部調査委員会としては、今回の指摘および本調査を契機として、PyCon JPがこれらの改善策を形骸化させることなく、責任を持って実行していくことを期待している。

以上